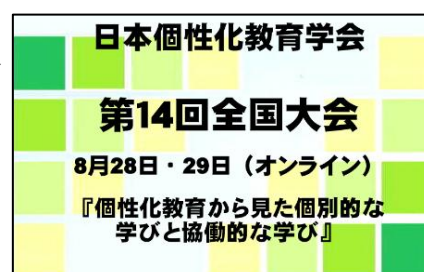


## 〈第 14 回日本個性化教育学会・オンライン大会〉

## ●テーマ『個性化教育から見た個別的な学びと協働的な学び』

第 14 回全国大会は、オンライン方式で 8 月 28・29 日、200 名を超える参加者を得て開催されました。対談・シンポジウムでは、各先生方から、新しい知見やこれからの指針となるご意見を頂戴しました。各分科会や自由研究発表でも貴重な報告や活発な質疑応答があり充実した会になりました。会員の皆様にその報告を行います。



●日 時 2021 年 8 月 28 日 (土)・29 日 (日)

●実施形態 ZOOM システムによるオンラインでの開催

●日 程

8 月 28 日	9 : 45～10 : 00	開会行事
	10 : 00～12 : 30	対談 : 「個に応じた指導から個別最適な学びへ」 天笠茂 (千葉大学名誉教授) 加藤幸次 (本学会会長上智大学名誉教授) コーディネイター 奈須正裕 (上智大学教授)
	13 : 30～16 : 30	分科会 1 「自由進度学習フォーラム」 コーディネイター 佐野亮子 (東京学芸大学) 分科会 2 「英語教育の新たな展開」 コーディネイター 伊藤静香 (帝京平成大学) 自由研究発表 1

8 月 29 日	9 : 30～12 : 30	分科会 3 「個性化教育における多様性と包摂」 コーディネイター 伏木久治 (信州大学) 分科会 4 「個性化教育と探求・総合的な学習」 コーディネイター 藤本勇二 (武庫川女子大学) 自由研究発表 2
	13 : 30～16 : 30	シンポジウム : 「個別的な学びと協働的な学びの一体的な充実」 シンポジスト 合田哲雄 (文部科学省) 秋田喜代美 (学習院大学) 中川一史 (放送大学) 司 会 奈須正裕 (上智大学)
	16 : 30～16 : 40	閉会行事
	16 : 40～17 : 00	会務総会

# 対 談： 個に応じた指導から個別最適な学びへ

対 談 者	天笠 茂（千葉大学名誉教授） 加藤幸次（上智大学名誉教授）
コーディネーター	奈須正裕（上智大学教授）

まず、コーディネーターから『令和の日本型学校教育』の公表以降、「個別最適な学び」に注目が集まっている。子どもの多様性に寄り添い、一人ひとりに最適な学びを提供する試みは、我が国でも大正期や1971年の中央教育審議会答申において提起され実践されてきた。この理念の実現に向け、「指導の個別化」と「学習の個性化」という概念を対置させるモデルを考案したのが、当時、国立教育研究所の所員の加藤幸次先生である。2021年答申は、これを教師視点から整理した概念が『個に応じた指導』である。個別最適な学びとは、1971年の中教審答申以来、脈々と実践されてきた指導にほかならない。ではなぜ今、再び議論するのか。そこにはどのような経緯や問題意識があり、未来に向けてのどのような展望があるのかという話題提起があった。

中央教育審議会教育課程部会の部会長として『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の取りまとめにも尽力され、個別化・個性化教育のパイオニアである天笠茂先生は、次の4つを指摘した。「1 今までも『個に応じた指導』に関わる教育実践について『個別最適な学び』への蓄積があった」「2 『個別最適な学び』が『誰一人取り残さない』と結びつけられたことに対して『個別最適な学び』は、教室内はもとより、教室さらには学校外も含め、全ての子どもを守備範囲として学びの実現を図るところにある。方法上の改善を越えて制度面の改変に踏み込む議論が求められる」「3 デジタル化への対応と『個別最適な学び』との接近の課題と『協働的な学び』との一体的な充実と多様な学びの確保」「4 『個別最適な学び』の下地として、『未来の教室』、『EdTechの活用』、『学びのSTEAM化』、『学びの自立化・個別最適化』、『新しい学習基盤づくり』、『Society 5.0』がある」

「個人の特性に応じた教育方法による指導の改善」を指導してきた加藤幸次先生は、40年前の米英と日本の教育事情を整理して述べた。東浦町立緒川小学校を中心にスタートした「指導の個別化」と「学習の個性化」のモデルと実践について、当時を振り返り分析と経過を述べた。更に、天笠先生からの質問を受けて、当時の背景や課題と成果について語った。その後の対談で、加藤先生が始めた実践は、オープンスクールの数だけでなく、現在も全国的に広がりをもち「指導の個別化」と「学習の個性化」が、「総合的な学習」「自由進度学習」などの実践として全国に広がり普及していることが示された。

途中、対談に参加していた当時のオープンスクールである緒川小学校（愛知）と西条小学校（広島）で学び現在教育者として活躍している、中島・吉田・飯干の3人の各氏が参加し、「子どもの立場」で当時の教育が学ぶ側に与えた強い影響を語った。

その後の討論で、「学びの自立化・個別最適化」は、誰一人取り残さない教育、一人一人バラバラに学ぶのではなく自立的な力と他とのつながりを活かす力が必要であること、外国人・不登校・ユニバーサルデザインなどの多様性、という令和の日本の教育課題に立ち向かう理念と方策であると共に、本学会が40年追究・実践してきた方向であることを再確認できた対談だった。

（文責・東京・佐久間）

# シンポジウム：個別的な学びと協働的な学びの一体的な充実

シンポジスト 合田哲雄（文部科学省） 秋田喜代美（学習院大学）  
中川一史（放送大学）  
司 会 奈須正裕（上智大学）



▲ 秋田先生の資料から

大会の最後を飾るシンポジウムは、現場主義的教育心理学者として日本の教育実践研究をリードする秋田喜代美先生の提案で幕を開けた。秋田先生は、個別的な学びと協働的な学びは、主体的・対話的で深い学びを実現するためのものであり、生まれながらにして主体（Agent）である子どもが居場所や安心感を得て、集中・没頭しながら学べる質とすることが重要である。その際、鍵となるのが環境を通しての教育と足場かけであり、教師に加えて子どももその構成者であるとの認識が不可欠であると指摘された。

後半では、子ども同士だからこそ生まれる支え合いにより自然な形で進行し深まりを見せていく、子どもたちの伸びやかな学びの姿を数多く紹介いただき、私たちがこれから目指すべき実践のイメージをクリアに、また豊かに持つことができた。

次に、長年にわたって情報教育の実践・研究に第一線で取り組んでこられた中川一史先生より、GIGA スクール構想とそれがもたらした一人一台端末の可能性について整理と提案がなされた。中川先生によると、学習者用デジタル教科書は、拡大表示、文字色・背景色の変更、ふりがな表示、音声読み上げなど、自分の実態やペースに合った使い方が可能で、これにより、機能の選択や教科書の内容へのアクセスが容易になった。その一方で、「本文抜き出し機能」を使えば、頭の中にある思いや考えを視覚的に表し、伝え合う活動が活性化するので、友達と考えを深め広げることができる。これらを踏まえ、GIGA スクール構想とは、これまでの授業方法、教科書の位置付け、教師の役割、学校のあり方、児童生徒にとってのツールとの関わりを再考・再構築するきっかけであるとまとめられた。

最後に、二度にわたり学習指導要領改訂の中心的役割を担った合田哲雄氏が登壇され、現在はデジタル・トランスフォーメーションの時代あり、一人一人が自らゴールを設定し、自分の学びを調整するとともに、他者と対話し協働する力をはぐくむ学校教育が社会や産業をリードする。そのためには、一人一人の認知の特性を踏まえてその力をさらに伸ばす刺激を与え、その伸びを手間暇かけて可視化することや、学びは他者との対話を通して「納得解」を形成するためにこそあるとの認識の共有が不可欠になってくる。これこそが個別的な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められている所以であり、今こそ、通奏低音のように受け継がれてきた我が国学校教育の知的蓄積の出番であると訴えた。以上三者の提案を受け、後半ではフロアも交えての活発な質疑・応答、討論がなされた。

（文責・東京・奈須）

## 分科会 1

## 「自由進度学習」その拡充と進展



話 題 提 供： 二野宮加代子（廿日市市立宮園小） 鈴木友宏（天童市立天童中部小）  
岩田 祥（木曽町立福島小）

コーディネイター 佐野亮子（東京学芸大学）

本分科会では、司会より趣旨説明と、「個別最適化された学び」を具現化する方法としての「単元内自由進度学習」について概略の紹介があり、続いてこの実践を近年スタートさせた3つの小学校の実践報告が行われた。

最初に、広島県の宮園小学校は、「自立した学び手」の育成を目指すなかで、令和2年度に先ず3年生以上の算数科で教科書をベースとした1単元1コースの自由進度学習を行った。児童は進んで学び、知識技能の向上もみられたが、進度の差や思考力の伸び悩みもあったため、今年度は①学習方法の選択②支援の充実③学習環境の工夫を重視し、実践を進めている。学習経験を積み重ねることで、児童が自分で目標を設定し計画を立て、家庭学習でも取り組む姿がみられるようになり、教師の意識も「もっと児童に学びを委ねてみよう」と変化が起り始めているとの報告があった。事例は、4年算数「小数」が紹介された。

次に、山形県の天童中部小学校は、「一人一人が未来の創り手となる」を念頭に「子供主体の授業（子供がする授業）」を目指し、「教師と仲間が創る授業」「自学・自習」「フリースタイル・プロジェクト（個人内総合）」「単元内自由進度学習（マイプラン学習）」の4つの取り組みを行っている。このうち自由進度学習は、今年度から全学年で（特別支援学級も）年間3回程度実施する計画で実践を進めている。大規模校のよさ活かし、教師はチームで学習材開発や学習環境づくりを行っており、児童に自分で考え調べる力がついてきたことで、仲間と創る授業にも相乗効果があらわれてきているという。事例は、5年理

科「メダカの誕生」と社会「寒暖な土地のくらし」の2教科同時進捗と、6年の歴史学習が紹介された。

最後に、長野県の福島小学校は、郡内の小規模校での実践に学びながら、令和2年度から「自分で学ぶ力を伸ばす学習」として各学年が学期に1回程度のペースで自由進度学習を行っている。教師が信じて委ね見守ることで、子供は場を選んで一人になって課題に向かい、納得を求めて再挑戦し、友の考えを自分でも試す姿をみせた。「めっちゃ楽しい」「集中できてうれしい」「自分で考えると頭にはいる」という子供の声に、「いつも時間を奪っていたのかも」と教師も普段の授業を見直すようになり、授業観も変化してきている。今年度の1学期は、2年国語、4年理科、5年算数、6年社会・算数（2教科同時）と実践を行った。事例は、2年国語「スイミー」で思考を促す学習カードの工夫と学びの具体が紹介された。

分科会の後半は、参加者からの質疑応答を中心に協議が行われた。「自校でも自由進度学習を試みているが、〇〇に悩んでいる、どうしているのか」といった具体的で建設的な協議が途切れることなく続く一方で、「方法論だけでなく根底に流れる理念が大切だと実感した」「秋から取り組みます」という感想もチャットに寄せられた。

（文責：東京・佐野）

## 分科会 2

## 「英語教育の新たな展開」



話 題 提 供： 坂本ひとみ（東洋学園大学） 石井英里子（鹿児島県立短期大学）  
松倉紗野香（埼玉県立伊奈学園中）

コーディネイター 伊藤静香（帝京平成大学）

小学校段階での英語教育は、2020年より中学年からの実施となり、高学年は教科となったことで新たな段階に入ったといえる。分科会2では、これまでの「英語に慣れ親しむ」ことを中心とした授業実践から、「英語科」としての外国語教育の指導内容・方法について、一歩先を見越した3つの視点で今後の英語教育を検

討した。

第一のテーマとして、坂本先生より国際理解教育と CLIL の視点からの発表を頂いた。1970 年代のユネスコの勧告に遡り、先生ご自身の異文化接触のご経験、東日本大震災の時を経て現在に至るまで、真の「国際理解」の追求とともに英語教育で CLIL を活用した指導法を検討された。諸外国の実践例では、特に環境問題をテーマにした CLIL の要素を持つ授業は昨今の SDGs の視点から日本の授業にも取り入れ可能な点がある。また、トルコの子供たちとの交流で、震災を経験した日本にいる子供たちへ励ましの手紙を頂くという内容が印象的であった。何百通にもわたる外国の人からの英語のメッセージは、教科書やドリルのパターン化された言語としての英語ではなく、今を生きる人の心のこもった「生きた言葉」である。英語を通じた国際交流、CLIL をベースにした指導法の特性から多くの示唆を得られた。

第二のテーマでは、石井先生より異文化コミュニケーションの視点から発表を頂いた。従来重視されてきたといえる文法中心的な指導法に対して、異文化コミュニケーションの要素が介入した指導法では、学習者同士の協働的な学びにつながる。英語教育における対話を軸としたコミュニケーションアップ

ローチを通じて、実践例からは地域のリソースを利用した活動で多様な文化（国・文化の違いにとどまらず異学年での交流例）を積極的に教育の内容（素材）に取り入れることの意義が示された。

第三のテーマでは、松倉先生より SDGs の内容を入れた英語教育の視点から発表を頂いた。持続可能な社会の作り手の育成という目標にむかい、英語科での実践で実現する。SDGs は様々な教科と関わりがあり、1つのトピックの捉え方は教科により異なることもある。さらに同一のトピックでも児童・生徒の興味関心は多岐に渡ることから、多様な学びが生まれる。“Faithful Elephants”を題材にした実践では、海外の動物園を調べる、英語で情報を収集する等、生徒が探求したい内容について学習方法を選択しながら進めるという点で、個別最適化に通じる学習の可能性がある。

「小学校段階から英語に苦手意識を持つ子が増加するのでは」という懸念がある一方で、本分科会の3つの観点を踏まえた実践は、児童・生徒一人一人が自分にとって意味のある内容に関わり、自主的かつ協働的な学びを伴う英語科の授業構築に新たな可能性を与え得る。（文責：東京・伊藤）

## 分科会3 「個性化教育における多様性と包摂」

話題提供： 矢田明恵（ユヴァスキュラ大学）  
池田信一（志免町立志免西小）  
野口晃菜（株式会社 LITALICO）  
コーディネーター 伏木久治（信州大学）

本分科会は、「個性化教育における多様性と包摂」をテーマに掲げ、特別支援教育のアプローチから“個に応じた教育”を捉え直すセッションとして企画された。ZOOM ミーティングには 60 名ほどの参加者が集まり、前半は 3 名の話題提供者から 30 分ずつのプレゼンテーション、後半は「個別支援計画」と「合理的配慮」をキーワードとしたディスカッションを行った。

話題提供者の一人目は、フィンランドのユバスキュラ大学の研究員でインクルーシブ教育を研究しておられる矢田明恵氏。国際的な視野から“障がい者”の教育をめぐる議論を紹介しつつ、わが国の幼稚教育や学校教育における課題を、フィンランドの事例を踏まえて具体的に提言していただいた。二人目は福岡県内で長年個性化教育の実践に尽力してこられた池田信一氏。報告事例は特別支援学級



◆その日の昼休み、突撃状態で交流学級の先生に売りに行く

での自由進度学習の取り組みだった。子どもたちのエピソードで語られる実践からは、通常の学級でも求められる多様性への配慮を考えさせられた。三人目は障がい者の就労支援などの事業で創業し、近年一部上場企業となった話題の株式会社 LITALICO の野口晃菜氏。小学校 6 年生の時から米国での学校生活を経験し、そこで脳性麻痺の級友と出会ったことがインクルーシブ教育を研究する契機になったそ



うだ。子どもたちの多様性を大切にする LITALICO ジュニアの指導的立場で各種サービス開発や人材育成の仕組み作りに取り組まれている最近の事業内容を紹介していただいた。参加者からは市町村教育委員会や国立教育政策研究所等との連携を期待する声までであった。

この分科会企画は、深刻な少子化に伴う児童生徒数減少に逆行して、特別支援学級および特別支援学校の児童生徒数が増加の一途をたどっている実態に疑問を抱いたことから生まれた。すなわち、現在の学校教育が多様性への寛容さを失い、一斉画一型の集団教育の負の側面が強化されているのではな

いかという懸念を研究課題にしたのである。これまでの「個に応じた指導」は、教える側の論理で対応していたかも知れないが、学ぶ側の論理に立脚した子どもの多様性には配慮が足りなかったのではないかという気づきを共有し、一人一人の学習者が多様な学び手であるという基本的な前提に立った議論が展開された。与えられた環境に合わない子どもを「困った子ども」扱いするのではなく、それぞれの子どもに合った環境をデザインしていくことの重要性を再認識できたが、「環境が変われば行動が変わる」というフレーズが話題提供者に共通していたことが印象的だった。(文責：長野・伏木)

## 分科会 4 「個性化教育と探求・総合的な学習」



話 題 提 供： 佐野正樹（北見市立三輪小） 三橋和博（阿波市立吉野中）  
箱根正斉（西宮市立北六甲台小）  
コーディネイター 藤本勇二（武庫川女子大学）

主体的・能動的で問題解決的な学びが連続する「探究」にこそ、「個別」と「協働」が両立する鍵がある。第4分科会では、この問題意識をもとに、数学、特別活動、総合的な学習の時間の実践を足場に「個別最適な学び」と「協働」の往還するための「探究的な学び」の在り方や手立てについて議論することができた。

1. 特別活動における実践：佐野正樹先生（北海道北見市三輪小学校）

「集団や社会の形成者としての見方・考え方を深める実践の在り方～一連の学習過程を意識した学級活動の実践～」をテーマに報告いただいた。特別活動では、学んだことを現在及び将来の生活改善や集団づくりに実際に生かすことができるように指導することを大切にしている。個人の資質・能力を育成するだけでなく、集団づくりに寄与することが特別活動において重要なのである。

2. 数学における実践：三橋和博先生（徳島県阿波市吉野中学校）

「個別的な学びと協働的な学びの往還を促進する知の総合化ノート」をテーマに報告いただいた。生徒が自らの学びをマネジメントすることで一人一人の課題意識を大切にしながら、協働的に課題解決に取り組みせ、その結果を個人の学びにつなげていくことを大切にしてきた。そのツールとして「知の総合化ノート」を開発し、「個別的な学び」と「協働的な学び」の往還する探究的な学びについて実践してきた。

3. 総合的な学習の時間の実践：箱根正斉先生（兵庫県西宮市北六甲台小学校）

「探究し続ける子供の育成に向けて～探究的な見方・考え方を働かせて～」をテーマに報告いただいた。1) 教科の知識・技能の活用・発揮から探究的な見方・考え方を働かせる問題解決、2) 自己の生き方に迫る学び探究課題の設定、3) 協働的に最適解を導き出す姿、の視点から子供が自らの生き方に迫るため、総合学習において探究的な見方・考え方を働かせて課題解決することが重要である。

後半の議論では、主に特別活動と教科、総合的な学習の時間の関連、必然性のある振り返りが探究を引き出すという「振り返り」の重要性について話われた。分科会の議論を通して、「個別」と「協働」は、両立しないという誤解があるが、決して矛盾しないことを実践の姿をもとに示すことができた。さらに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還が実現することは、子供一人一人の居場所を学級につくることにもつながることが3つのご報告からも確認できた。(文責：兵庫・藤本)



## 【1 日目】

司会：藤本勇二（武庫川女子大学）  
大村龍太郎（東京学芸大学）

- (1) 大村龍太郎（東京学芸大学）  
「自由学校」の理念と実践が新任教員の教育観形成に及ぼす影響に関する一考察  
～北九州子どもの村小学校と公立学校に赴任した新任教員の教育観の比較をもとに～
- (2) 中島 信（立命館小学校）・刀祢晴朱（立命館小学校）・岡井健登（立命館小学校）  
コンピテンシー・ベースの教科授業はいかに能か  
～一教員ができるカリキュラム・マネジメントの条件を探る～
- (3) 中西徳久（西宮市立夙川小学校）  
藤本勇二（武庫川女子大学）  
知識が活用できる「深い学び」をめざした小学校理科授業の改善  
～OPP シートにより個への支援を通して～
- (4) 松井香奈（大阪市立吉野小学校）  
藤本勇二（武庫川女子大学）  
一人一人が支え合う学級づくり  
～コロナ禍での小学校5年生の実践を通して～
- (5) 石田 航（綾部市立綾部小学校）  
藤本勇二（武庫川女子大学）  
小学校における深い学びをめざしたプログラミング教育の実践  
カリキュラムマネジメントを通して

## 【2 日目】

司会：浅沼 茂（立正大学）  
浦郷 淳（長崎国際大学）

- (1) 下岡麻美（西宮市立広田小学校）  
図工におけるフレームワークの活用  
～制作時間の確保とアイデアを深めることの両立～
  - (2) 横山みどり（筑波大学附属小学校）  
Well-being を目指す授業  
～小学校家庭科における実践～
- 発表資料から▶
- 
- (3) 浦郷 淳（長崎国際大学）  
小学校1年生における「協働的な学び」に関する研究  
～生活科・算数科の実践を通して～
  - (4) 村松麻里（金沢学院大学）  
英語教育における「あそび」についての一考察  
～絵本と歌あそびを中心に～
  - (5) 吉田悠一（松阪市立久保中学校）  
清水公男（文京学院大学）  
思考ツールを活用した中学校の2技能統合型の言語活動に関する英語実践研究  
～Writing 学習の振り返りと学習支援を可能にした思考ツールの効果検証～
  - (6) 浅沼 茂（立正大学）  
新学習指導要領の「思考力」とは

◆次年度の全国大会は、2022 年 8 月に開催の予定です。対面で行うかオンライン形式で行うかは、2022 年 3 月ごろ、状況を判断し決定する方針です。対面の場合、会場は上智大学です。

事務局への問い合わせ・連絡先

庶務部長 佐久間茂和

〒362-0064 埼玉県上尾市小藪谷 77-1 3-28-502

TEL 080-5429-1681

E-mail [Sakuma.s@7dion.ne.jp](mailto:Sakuma.s@7dion.ne.jp)

日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com>.

日本個性化教育学会 第 36 号

2021 年 10 月 3 日発行

編集責任者 事務局長 奈須正裕

編 集 広 報 部

## 2020 年度 日本個性化教育学会 会計報告

2021 年 8 月 28, 29 日

(2021 年 3 月 31 日締め)

## 【収入の部】

項 目	予 算	決 算	備 考
会 費			
団体会費	600,000	416,000	4000 円×104
個人会費	14,000	7,000	7000 円×1
繰越金	217,058	217,058	前年度繰越金
預金利子	0	0	銀行利息
免許更新・全国大会	150,000	340,111	全国大会
論文投稿料等	30,000	35,000	学会誌論文投稿料
その他	50,000	0	書籍販売収益 寄付
合 計	1,036,030	1,016,669	

項 目	予 算	決 算	備 考
事業費			
全国大会運営費	100,000	80,000	全国大会運営補助費
春季大会運営費	100,000	0	会場費・発表者交通費
学会誌刊行費	500,000	452,400	会誌編集印刷・編集通信費等
広報活動費	200,000	99,252	会誌・会報・HP 運営
事務費			
郵送・通信費	40,000	1,760	連絡通信等
消耗品日	30,000	2,200	印刷・文具等
諸費	66,030	3,410	手数料等
合 計	1,036,030	639,022	

## 【支出の部】

○【差し引き残高】1,016,669-639,022=377,647

上記の通り決算報告いたします

会長 加藤幸次 事務局長 奈須正裕 会計部長 五十子晴美

以上相違ないことを報告いたします

会計監査 中澤米子 多田信夫 (印章略・・監査承認ハガキを受理しています)

## 2021 年度 日本個性化教育学会 会計予算案

2021 年 8 月 28, 29 日 (2021 年 3 月 31 日時点)

## 【収入の部】

項 目	内 訳	予 算
会 費		
個人会費	4000 円×100	400,000
団体会費	7000 円× 1	7,000
前年度繰越金		377,647
会誌論文投稿料		30,000
免許更新・全国大会		300,000
合計		1,114,647

## 【支出の部】

項 目	内 訳	予 算
事業費		
全国大会運営費	夏の大会の運営	100,000
春季研究会運営費	会場費・発表者交通費等	100,000
学会誌刊行費	学会誌編集印刷・編集通信費等	500,000
広告活動費	会報発送・ホームページ運営	150,000
事務費		
郵送・通信費	連絡通信費	50,000
消耗品費	印刷・文具費	50,000
諸費	弔電・手数料・予備費	164,647
合計		1,114,647

会長 加藤幸次

事務局長 奈須正裕

会計部長 五十子晴美